

# 学習や対人関係につまずきが見られる児童に対する教育的支援のあり方

愛媛大学教育学部 吉松靖文研究室  
南国市立長岡小学校 教諭 岳本 由美

## 1 はじめに

平成24年12月5日に文部科学省が発表した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」によると、知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合が、推定値6.5%であった。また、同調査では学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒以外にも何らかの困難を示していると教員が捉えている児童生徒の存在がうかがえる。

本研究では、学習及び対人関係や社会性につまずきが見られ、特別な支援を必要とする児童に対する、振り返りを促す支援を通して、教育的支援のあり方を検討する。そこで、学習面、行動、社会性の面などを児童の実態から整理すること、発達検査の結果から認知特性を把握することで得られた情報を総合的に分析、解釈し、アセスメントをもとに支援を計画した。そして、支援者の客観的評価と本人による主観的評価の両側面から成果と課題を検討した。また、保護者の教育相談を通して、家庭と連携しながら支援を遂行した。

## 2 研究目的

自閉症スペクトラム障害の児童生徒は、過去の経験から得たスキルや気づきを日々の学習や問題解決に生かすことの困難や、言葉での振り返り能力の弱さが、学習や対人関係のつまずきにつながっている。対人スキルの効果的な使用を促すかわり、言葉での振り返りを促すかわりを通して、振り返り能力を高める支援を行い、学習や対人関係に改善をもたらすことを目的とする。

## 3 研究内容

### (1) 方法

公立の小学校の通常学級に在籍する6年生の児童（A児）を対象とする。筆者は支援員として週1日、A児の在籍学級にて支援を行った。A児は、就学時の教育相談において高機能自閉症の疑いと判断されており、集団生活では個別の声かけを必要としている。

まず、過去の学習、行動面に関する情報に加えて、DN-CAS及びWISC-IVの検査結果からアセスメントを行った。DN-CASの結果からは、注意やプランニングに比べ、聴覚的短期記憶の弱さがみられると共に、方略の言語化が難しかったことにより、メタ認知能力の弱さが推測された。また、WISC-IVの結果からは、視覚的情報に強く、モデルがあれば課題遂行に高い集中力を発揮することができると推察された。一方で、ワーキングメモリーの弱さ、複雑な思考を伴う認知活動の弱さが考えられた。また、自分の考えを書く活動や、一度に複数のことに注目して作業を進めるようなことは苦手で、個別の声かけや支援を必要としている。A児の背景には、耳から入った情報を正確に聞き取り、理解したり記憶したりすることへの困難、話題や状況を把握し、他人の意図を理解することやなめらかなコミュニケーションを行うことに対する困難、論理的に物事を考え文章を構成することの困難、完成をイメージし、手順を考えて遂行することへの困難が推察された。

### (2) 手続き

対人関係に対する支援としては、コミック会話（キャロル・グレイ、2005）やロールプレ

イによるソーシャルスキルトレーニングを行った。対人関係を簡単な絵に示すことによって視覚化し、話す言葉や話しかけるタイミングが分かるように提示した。そして、ロールプレイによってその場を再現したり、予想したりして現実に即した会話の練習を行った。家庭学習においては、予習中心の学習に切り替え、あらかじめ答えや完成したものを見てから、問題や課題に取り組むことによって、イメージーションの障害からくる習熟の困難を予防した。また、文章構成を考えるために項目カードを使って、言語活動としての日記指導を行った。授業中には教師の口頭説明や指示を文字化してワーキングメモリーの弱さに配慮した。

そして、A児の行動変容をもとに支援を振り返り、客観的に評価した。また、A児自身による自己評価を行い本人の視点からも支援の結果を振り返った。自己評価シート（図1）に具体的な項目を示し、アンケート形式で4件法の回答様式にした。また、筆者との対話を通して、できるようになったことやこれからできるようになりたいことを振り返った。

6年生になって自分ができるようになったことやこれからやってみようと思うことなどを一緒に考えてみましょう。とてもそう思う4点、そう思う3点、あまりそう思わない2点、そう思わない1点に○をつけてください。

1. お家で日記を書いたこと

写真をはったり絵をかいたりすると、その時の様子をよく思い出した。	4	3	2	1
写真や絵があると、言葉がうかんできやすかった。	4	3	2	1
写真や絵があると、もっと書きたいと思う。	4	3	2	1
項目のカードを使って書くとき、何を書けばいいのかが分かりやすかった。	4	3	2	1
項目のカードを使って書くとき、言葉がうかんできやすかった。	4	3	2	1
項目のカードを自分で並べて書くことができた。	4	3	2	1
項目のカードを自分で並び替えて、書くことができた。	4	3	2	1
項目のカードを使うと日記が書きやすい。	4	3	2	1
気持ちを色で表すことができた。	4	3	2	1
気持ちを色で表すと自分のことをふり振り返りやすい。	4	3	2	1
気持ちを色で表すことは楽しいと思う。	4	3	2	1
日記をほめてもらうとうれしい。	4	3	2	1
日記を書くことは楽しいと思う。	4	3	2	1



図1：自己評価シート

### (3) 結果

#### ア ソーシャルスキルトレーニング

A児は知的能力に比べて社会的な言語能力の弱さがあるため、コミュニケーションの意味が分かりにくい。コミック会話を簡略化したもので対人関係を視覚化し、生活の中で会話が必要な場面を提示しながら、過去の場面を振り返ったり、将来起こり得る場面をロールプレイで練習したりして、適切な言葉や行動について一緒に考えた。

#### (ア) コミック会話による支援事例

A児は自分がどう行動すればいいのかを周りの友達の動きを見て判断している。分からない時に自発的に人に尋ねたり頼ったりする場面は見られない。しかし、日常生活において、常に近くに友達がいるわけではなく、将来的には、人に依頼するスキルが必要になってくる。そこで、自分から人に困ったことを伝えられるように、学校で最も身近な大人である先生に対して、困った時に人に頼るソーシャルスキルトレーニングに取り組んだ（図2）。また、場合によって、相手が友達であれば、敬語を使わなくても良いということを伝え、相手が友達であった場合の言い方についてもロールプレイで練習した（図3）。

A児が困った場面では、筆者が促すと、「どうすればいいですか」と、練習したスキルを使うようになり、徐々に、自分から筆者や英語のアシスタントティーチ

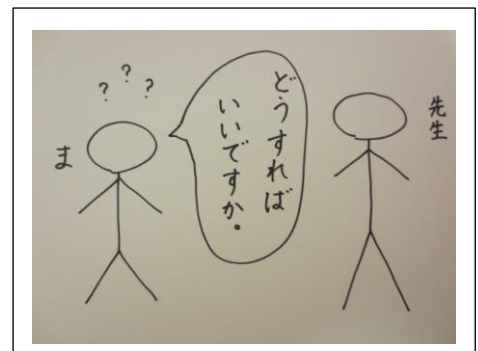


図2：困った時先生に尋ねるスキル

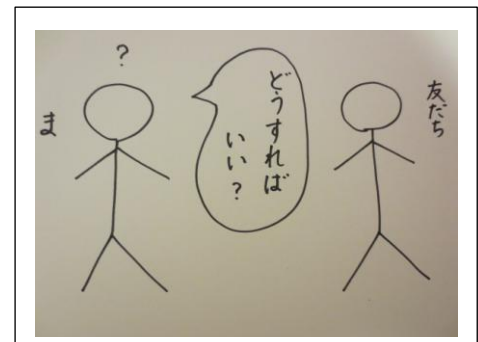


図3：困った時友達に尋ねるスキル

ャーなど、大人に対して分からないことを尋ねたり、自分の解答が正解かどうかを確認したり、困った時に声をかけてくるようになった。さらに、掃除中、下級生に対して、A児の自発的な援助行動が見られた。

(イ) 本人に対する客観的評価

ロールプレイで練習したスキルを、生活のあらゆる場面において、その場に応じた言い方に変えることができるようになった。特に、親しい人に対して自発的に声をかける行動が多く見られ、対人関係のレパトリーも広がった。コミック会話によって、視覚的に会話を理解し、コミュニケーションのイメージができたと考えられる。また、現実に応じた場面設定を行い、ロールプレイでリアルにその場面を再現できた。しかし、未経験の場面や慣れていない相手になると、話しかけるタイミングがつかめなかったり、どんな話し方をすればいいのか分からなかったりして、行動に移せないことがあった。

(ロ) 本人による自己評価

人の線画と吹き出しを書いたコミック会話を見ると、「人に話しかけやすかった」や「何を言えばいいのか分かった」と肯定的に評価し、話しかけるタイミングについては、背中を押してもらったり、具体的に教えてもらったことが良かったと振り返っている。また、人に話しかけることは得意ではないが、きっかけや必要性があれば、自分から話しかけることはできるし、困った時は、自分から他人に依頼することもできるようになったと述べている。そして、「今後はいろんな人に話しかけようと思う」と人とのかわりに意欲を見せている。

イ 言語活動

具体的な体験を通して、絵や写真などの視覚的手がかりをもとに日記を書くこととした。日記はできごとや経験したことを言語で振り返ることができ、客観的に自分の活動を見る視点を育てることができる。

海津(2012)は、「作文(書くこと)の前に同じ表出言語である話すことへのアプローチも欠かせない。すなわち、自分の伝えたいことをまずはことばによって伝えられるようにする。もし、そうした力が十分に育っていない場合には、話すことへの指導を充実させることが先決である。」と述べ、子どもが話す内容を書くことにつなげていく支援を提案している。そこで、母親と言葉のやりとりを通して、できごとやその時の様子を一つ一つ振り返り、それを言葉にしていく過程を文章化した。また、項目カードを用いて、書く内容を構成した。さらに、自分の気持ちに色をつけて、自分の感情に意識を向けた。感情に意識を向けることは自己を振り返ることにつながる。自分の感情を知ることによって、メタ認知の発達を促すことに効果があるのではないかと考えた。

(ア) 日記よる支援事例1

図4は、夏休み中に母親と言葉のやりとりを通して書いている。いつ、誰と何をしたかに加えて、薄焼き卵を焼いて細切りにしたり、きゅうりを細切りにしたりして盛り付けたこと、作っている途中、母親に叱られたこと、工夫したことや難しかったことが書かれている。冷やしうどんを作ったことについて、母親がインタビュアーになり、何を切ったのか、どんなふうに盛り付けたのか、どんなところが難しかったのかなどを一つ一つ聞き出していった。A児は、写真を手がかりに、会話を通してできごとを振り返り、より詳しくその時の様子が再現された。

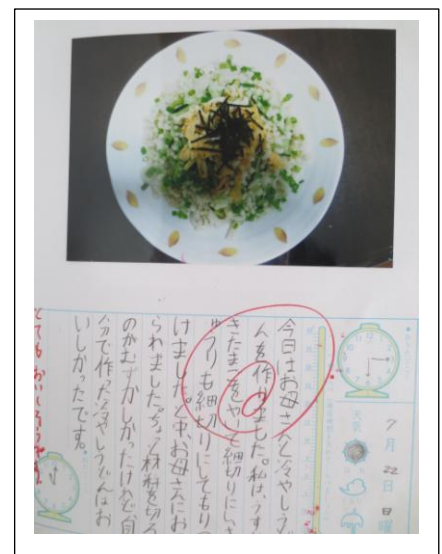


図4：A児の日記

(イ) 日記よる支援事例2

写真や絵を用いることはそのままに、インタビューの代

わりに項目カードを作成した（図5）。このカードは、「いつ」「どこ」「だれ」などの基本的な情報に加え、会話を書くためのかぎや「気持ち」「様子」などを、それぞれ項目として示し、何を書けばいいのかが分かるようにした。また、必要に応じて項目を増やせるようにした。A児に、日記を書く際には、カードを並び替えて書く順序を決めるように指示し、使い方を確認した。



図5：項目カード

さらに、気持ちを色で表してみてもどうかと提案すると、A児は母親と一緒に気持ちを表す色の尺度を決めた（図6）。気持ちを5段階で表し、その日の日記の隅に色を付けていった。とても嬉しいをピンク色、ちょっと嬉しいを赤、ふつうを黄色、ちょっと嫌を黒、とても嫌を青で表した。「嬉しい」の他にも「楽しい」や「美味しい」などの快の感情はピンクや赤、A児にとって「嫌」というカテゴリーに入る不快な感情は、黒や青で表した。気持ちを色で表現したことで、自分の感情を知ることができた。

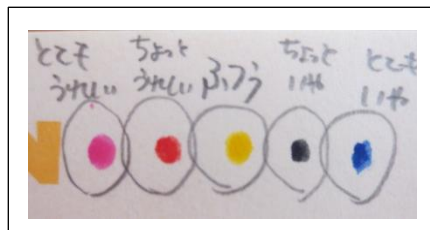


図6：気持ちを表す色

(イ) 本人に対する客観的評価

日記を書くことを通して、具体的な文章が書けるようになり、感覚を表現したり比喩を使ったりして表現も豊かになった。写真や絵などの視覚的手がかりを使うことによって、具体的にその場面を想起しやすくなったと考えられる。また、言葉のやりとりを通してできごとを想起させ、思いを引き出していった。やり取りの中で生まれた言葉を文章にして書いたことで、表現に幅が出たとも考えられる。

項目カードを使うと、構成が整って読み手に分かりやすい文章になった。また、自分の気持ちを振り返り、感情に色を付けることができた。自分の感情を感じ取り、自分のニーズを知るきっかけになったのではないだろうか。

(ウ) 本人による自己評価

写真や絵などの視覚的な手がかりを用いて日記を書いたことに対しては、肯定的な回答をしており、「その時の様子をよく思い出した」「言葉がうかんでやすかった」と評価している。項目のカードについても肯定的に評価していた。しかし、自分でカードを並べたり、並び替えることができなかつたと振り返った。感情を色で表すことについては、「自分の気持ちを色で表すことはできた」と評価しているが、「気持ちを色で表すと自分のことを振り返りやすいか」という問いに対して、「あまり思わない」と回答している。

ウ 自主学習の支援

これまでの自主学習は復習中心であった。復習だと学習の見通しが持てないため、予習中心の学習に変えた。新しい単元を事前に学習することにより、単元全体の流れが分かり、学習内容の理解を補うことができると考えた。国語科に関しては、教科書を読み、要点と思われる部分に線を引いた。また、算数の教科書の問題を、あらかじめ答えを見てから問題を解く方法や、社会科のまとめは、市販の参考書をモデルにして、色ペンを使って大事な用語が分かるように示した（図7）。自主学習が習慣化されると、A児が授業に積極的に取り組む姿勢が見えた。特に、算数では授業での理解が促進され、練習問題や学習帳に進んで取り組むようになった。また、テスト前には集中して勉強に取りかかり、意欲を見せている。要点をま

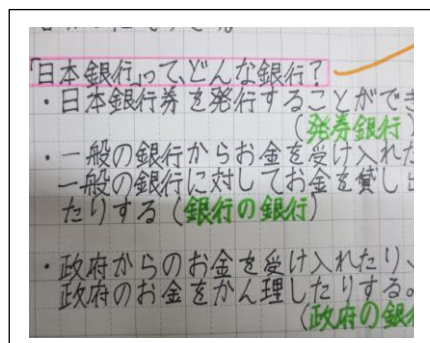


図7 自主学習ノート



とめて書いている参考書や、大事な用語をマーカーで強調すると視覚的に分かりやすいことなど、自分に合った学習の方略を身に付けることができた。

(7) 本人に対する客観的評価

あらかじめ答えを見て課題に取り組むといった方法は、A児が思考過程をイメージして問題を解くことに有効であった。また、予習によって単元の見通しを持つことができ、未知の学習に対する不安の軽減につながったと考えられる。授業への積極的関与や学習意欲の持続が見られることより、中学校進学に向けて、自分に合った学習方法を身に付けることができたともいえるのではないだろうか。

(4) 本人による自己評価

「予習をすることで学校の授業の内容が分かりやすかった」や「参考書などのお手本があれば勉強がしやすくて良い」と肯定的な評価をしている。また、自主学習は大変だと思いう一方で、勉強をがんばろうという気持ちが強くなったと述べている。しかし、テストの前には不安を認知しており、未知の問題が出される場面においては、不安傾向が強いことがうかがえた。

エ 授業中の視覚支援

授業中に教師が全体に出した指示を簡略化して書いて示したり、作業の手順を書いて示したりした。また、教師が発問したことを図式化して示したり、やり方を絵で示したりした。

(7) 視覚化による支援事例

国語の授業において、A児にとって理解しにくい登場人物の気持ちの変化をたどりやすくするための支援を、図8のように書いて示すことで行った。本文中の、登場人物の心情を表している言葉や様子が分かる文や言葉に線を引き着目する。次に、気持ちを弁別するために感情に名前をつける。そして、配布されていたワークシートに書き込むという手順を示した。A児は、作業内容を理解し、提示された手順通りに作業を進めることができた。

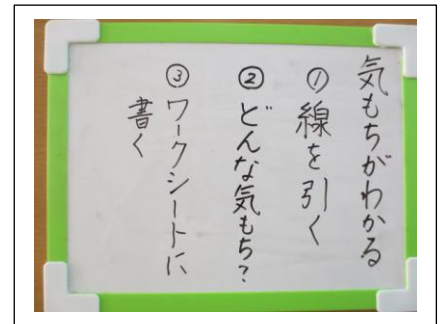


図8：心情描写の見つけ方

(4) 本人に対する客観的評価

視覚的支援によって、学習や活動に積極的に参加するようになった。手順や指示を文字化したことによって、活動に見通しが持てたことが、作業に取り組む意欲につながったと考えられる。自分が期待されていることを理解すると行動に移すことができた。

(7) 本人による自己評価

授業中に課題や指示を文字で書いて示したり、図や絵を用いて説明を補助したりしたことは、「とても分かりやすかった」と肯定的な評価をしている。その理由として、答えを導き出しやすかったことや何を考えると良いか理解できたからと述べている。

4 考察

(1) 視覚的支援とモデル提示の有効性

教師の指示や説明を文字化や発問の図式化によって、A児の困難さの背景にある、耳から入った情報を正確に聞き取り、理解したり記憶したりすることの苦手さを補うことができたのではないだろうか。特に文構造のあるものの記憶は苦手であるため、口頭での説明や講話などは、要約を視覚的に示すことで理解が促進されたと考えられる。A児も視覚支援に対して肯定的に評価していることから効果があったと考えられる。

絵や写真などの視覚的手がかりを用いて対話を通して作成した日記についても、文章が具体化され、表現が豊かになった。また、項目カードを並び替えながら文章構成を考えたことについて、カードが視覚的な手がかりとなり、言葉の表出を促したといえよう。しかし、自分でカードを並

べたり、並び替えたりすることができなかつたことについては、複雑な思考を伴う活動に対する困難さと一致し、それには他の手立てが必要であったと推測される。

コミック会話は、自閉症スペクトラム障害の児童にとって、抽象的で理解が困難なソーシャルスキルを視覚的に提示されたことによって会話を理解するうえで役に立った。A児の自己評価においても、コミック会話に肯定的な評価をしており、言葉のやりとりによって会話が成立することを理解できたと推察される。また、対人関係のつまずきには、話題や状況を把握し、他人の意図を理解することや、円滑なコミュニケーションをとることへの困難がある。視覚的に絵で示されたかかわりの一例がモデルとなって、ロールプレイした通りにコミュニケーションが再現された。モデルの再生によって対人関係が促進されたことにより、視覚的支援の有効性が示唆される。しかし、未経験の場面や慣れていない場所や相手になると、柔軟に対応できないことがあったため、いくつかシナリオを作って、様々な場面に対応できる練習を重ねる必要がある。

## (2) 共感的かかわりの重要性

思春期は、アイデンティティの確立を目指して、心理的、社会的にも自立に向かい、成長していく途上である。二次的な障害を予防するためにも周囲の人々の理解や適切な支援は肝要である。さらに、他者からの共感や認められる経験は、健全な精神を育むために必要である。

別府(2009)は、「ポジティブな自己評価を増やすことは、ストレートに自己肯定感につながるという考え方に違和感がある」と述べている。ネガティブな自己評価で心が揺らいだとき、自分を追い込んでしまう危険性をはらんでいるという理由からである。「共感的自己肯定感」は、そのどちらにも揺れながら、不安な自分、ダメなところもある自分も受け入れつつ、再び、不安が和らいだ状態に戻ることができる感覚である(別府、2009)。その感覚が育まれるには、自分を認めてくれる仲間、思いを共有する他者の存在が必要である。

本研究においては、A児にとって親しい友達の存在があり、担任や支援者のA児へのかかわりが共感性を含んでいた。また、A児を励まし支えている母親との安定した関係がベースにあった。A児のありのままを認めたり、受け止めたりしたことによって、安心して自己を表現できる関係が築かれ、自信につながったと推察される。

## (3) 自己評価の意義

人は他者とのかかわりを通して自己を認識することができる。ソーシャルスキルトレーニングを行う際も、A児に、適切な行動や改善点について、言葉で具体的に伝え、話し合ったことも振り返りにつながったと考える。このことから、他者評価を通して自己意識を高めることができたことが示唆される。また、支援者の客観的評価と本人による自己評価では、認知のずれが見られた。支援者の判断による支援が、支援を受ける側にとっては負担に感じることもあり得る。自己評価によって、自分がどんな支援を受ければより生きやすくなるのかを知ることができる。

自己評価を行ったことは、自分を見つめ、振り返る、自己理解の機会であった。自分の活動を振り返ることによって、自分のニーズに気づき、自分の思いを表出したり、自分の生活をコントロールしたりできるようになったと推察される。また、自己評価は、自己をモニタリングするメタ認知の発達を促すことができる。メタ認知があると、自分のことを理解する力や、自己の活動を修正したり、モニタリングしたりする力などが身に付いてくる。そして、自分のよさや得意なことを知り、将来の夢や希望につなげていくことが期待できる。振り返りを促すかかわりを通して、主体的に生きる基礎を培うことができると示唆される。

## (4) 今後の課題

メタ認知を育てるという考え方は、子どもの学習に関わってくる。教師がメタ認知について考えることで、子どもの内的な思考や学習過程を考慮する姿勢をもち、適切な教育の可能性が増大する。例えば、教師の発問によって、子どもたちの「内なる思考」を促したり、過去の学習を想起させたりすること等が可能になる。また、キャリア教育の視点からも自分のニーズを知り、主

体的に生きるための力としては肝要である。

メタ認知の弱さは言語を理解し言語で表現する力と関係している。言語に関する感覚や思考力を高めていくためには、小学校段階から各教科等で振り返りの時間を適切に授業に組み入れることなど、言語活動の重要性が示されている（文部科学省、2007）。学校の教育活動でメタ認知を育むためには、毎日の積み重ねが大切であると考えられる。例えば、授業や帰りの会などで、自己評価や振り返りの機会を多く持たせることによって、自分の思考や経験と向き合う機会が増え、自己の活動を点検したり修正したりできる。教師や仲間が、振り返りに対して共感的に受け止め、言葉で返してやるなどの、フィードバックが必要であるとも考える。他者と振り返りを共有することによって、他者の振り返りが良いモデルとなることもあり得る。

今後は、自閉症スペクトラム障害や発達障害のある児童生徒も含めて、通常の学級の中でメタ認知を育てていくための指導の工夫が求められるであろう。様々な振り返りのスタイルや、振り返りの継続によって、使われる言語による表現の変容などに着目したい。そのためには、教室の中に豊かな言語環境を整える必要があると考える。

## 5 まとめ

今回の研究で、自閉症スペクトラム障害の児童の自己評価や振り返りを促すアプローチが、児童の行動変容により、メタ認知の育成に有効である可能性が示唆された。日々の教育活動に、自己評価や他者評価を効果的に取り入れていく工夫が求められる。「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」（文部科学省、2012）においても、求められる今後の対応として挙げられているのは、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒を取り出して支援するだけでなく、それらの児童生徒も含めた学級全体に対する指導をどのように行うかを考えていく必要があるとして、社会生活上の基本的な技能を身に付けるための学習や、子どもたち一人一人が理解しやすいよう配慮した授業改善など、個人の支援を学級全体にどのように取り入れていくかという視点である。また、仲間づくりは、学級経営の要であると言っても過言ではない。友達のよさや強さを認め合える関係をベースに、目的を持って、向かう先のある集団作りを実践することが大切である。自然なサポーターが周りにいて、みんなが安心して学べる集団作りをめざして取り組んでいきたい。

### 【参考文献】

- 阿部利彦 2009『クラスで気になる子の支援 ズバツと解決ファイル～達人と学ぶ！特別支援教育・教育相談のコツ』金子書房
- 安部博志 2010『発達障害の子どもの指導で悩む先生へのメッセージ』明治図書
- 一般財団法人特別支援教育士資格認定協会 2012『特別支援教育の理論と実践 第2版 I 概論・アセスメント』金剛出版
- 一般財団法人特別支援教育士資格認定協会 2012『特別支援教育の理論と実践 第2版 II 指導』金剛出版
- キャロル・グレイ 2005『コミック会話』明石書店
- 佐藤 暁 2008『特別支援教育コーディネーターの手引き』東洋館出版社
- 杉山登志朗 2007『発達障害の子どもたち』講談社現代新書
- 別府 哲 2009『自閉症児者の発達と生活―共感的自己肯定感を育むために―』全障研出版部
- 松久真美 米田和子 2009『発達障害の子どもとあったかクラスづくり―通常の学級で無理なくできるユニバーサルデザイン―』明治図書
- 文部科学省 2012『通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について』
- 文部科学省 2007『言語力育成協力者会議 配布資料』